自己を Mr. Girard と呼ぶ形式についての一考察 *

吉 田 和 史

1．はじめに

英語では次のように自分自身に敬称をつけて呼ぶことがある。

(1)　Hello. I'm **Mr.** Thomas.
(2)　Hi, my name's **Mr.** Forsyth.
(3)　This is **Mr.** Brown speaking.

(1)(2) は教員が学生・生徒に向かって自己紹介をした際の表現、(3) は電話に出た直後の応答であるが、Mr. や Mrs. といった敬称を自分自身につけて用いるのは、日本語の母語話者の感覚からすれば不思議な感覚を抱く。[1, 2]　しかし 2 節で見るように、英語で書かれた小説を見るとこうした使用例はそれほど珍しいものではなく、このような事例は過去の語法研究書で既に指摘されている（Copperud 1980、Howard 1997、小西 2006）。[3]　ところが、筆者の知る限りこうした事実を説明した研究はこれまでのところ見当たらない。本研究ノートでは、こうした表現は英語が客観的表現を好むことを示す一つの事例であると述べ、このような表現の背後にどのような原理が潜んでいるのかを、廣瀬の三層モデルを用いて説明していく。

2．事例

本節では、主に *Come to the Office, Adventures of a new Principal*（以下 CTTO と省略して表記する）という小説から例を挙げていく。1990 年頃のアメリカを舞台にしたこの小説では、前校長の突然の死により新学年を前に校長となった主人公 Bob Girard が、新任校長として学校運営に奮闘する様子が物語の中心となっている。Girard 新校長の仕事に対する姿勢や人柄をうかがい知ることのできる一つの場面となっているのが、生徒達の新学年最初の登校日（登録日）である。新校長は、午前と午後、三々五々学校へやって来る生徒と保護者達へ、何度となく挨拶し自己紹介をする。そうした自己紹介の場面を観察する前に、まずは他己紹介の事例をいくつか見ておきたい。

(4) から (6) は、Bob Girard 新校長が教員達に紹介される場面である（下線は筆者による）。

(4) "Well, Mr. Hudson," Dr. Miller began, "I have very good news. In spite of the tragic sudden death of our school principal, Mr. McGowan, we are fortunate to have found a highly qualified young man to step in here at the last minute before school starts. **This is Mr. Bob Girard**. You should all have a copy of his application and resume in front of you – thanks, Marsha – and I'll be happy to answer any questions you might have. [...]."　(CTTO)

(5) "Mildred Watkins, **this is Mr. Bob Girard**, our new Principal."
"Very nice to meet you, Mildred. I look forward to working with you. I know how important you are to the school." (CTTO)

(6) When Mildred and I returned to my office, there was a woman waiting at our door. Mildred handled the introduction.
"Mr. Girard, this is one of our teachers, **Mrs. Glenna Rogers.** Mrs. Rogers, **this is Mr. Girard**."
(CTTO)

どの例においても、男性を紹介する際に敬称 Mr. を、そして（6）では女性の紹介に Mrs. を用いている。日本語でもこうした事例と平行的に、「先生」や「さん」といった敬称を用いて「こちらはジラード先生／さん」と紹介することが可能で、日本語の母語話者として、(4) － (6) の英語の例に対し違和感を覚えることはない。

こうした例に対し、以下の（7）－（14）は、本研究ノートで中心的に扱っていく事例を含む、Girard 新校長が何組もの生徒や保護者達に自己紹介をする場面の描写である（下線・波線は筆者による）。

(7) "Good morning, Connor. **I'm Mr. Girard** and I'm going to be ..." – I worried about this promise – "trying to help you in whatever ways I can. OK?" (CTTO)

(8) The first family started to push past me and then must have realized that I was the 'new guy.'
"You the new principal?" was the big question from the little person before me.
"Yes, I am. **I'm Mr. Girard**." (CTTO)

(9) Jess's mother began the process with Mildred. By now, the second family was facing me.
"Who are you?" came the question from the second little, cherubic face.
"**I'm Mr. Girard**, the principal. And who are you?"
"I'm Nancy Adams and I'm going to be in first grade." (CTTO)

(10) I stood up and extended my hand to him again.
"Good morning. **I'm Mr. Girard**, your new principal. And you are...?
After a pause, "I'm ... Travis Richards." (CTTO)

(11) "Who are you?" asked the more outspoken of the two.
"**I'm Mr. Girard**, your new principal. And who are you?"
"I'm Devin Swanson."
"I'm Kevin Swanson."
"We're in third grade," was the simultaneous answer to the next question I was going to ask.
"And I'm Marion Swanson," added mom. (CTTO)

(12) "Are you the principal?"
Another new face and voice with the same question.
"Yes, **I'm Mr. Girard**, the principal. And you are...?"
"I'm Anita Hopkins and I'd like to enroll my son, Jack, here in tenth grade." (CTTO)

(13) "Good afternoon," I said while clasping her hand. "**I'm Mr. Girard**, the new principal. And you are ...?"
"My name is Maria Hernandez," she said slowly and through a broken accent, "and this is my grandson,

Julio."　(CTTO)

(14) "Mrs. Driscoll? **This is Mr. Girard** over at the school."[4]

"Oh, no. What's he done already?" was the distressed reply.　(CTTO)

(7) − (14) のどの例においても、Girard 新校長は生徒や保護者への自己紹介にあたり一貫して I'm / This is Mr. Girard という形式で挨拶をしている。この Mr. Girard という表現形式は、(4) − (6) で見たように、新校長を This is Mr. Girard と他己紹介している形と同一であり平行している。これに対し、日本語では他人に対して「(あなたは) 鈴木さんですか」と問うことも、「こちらは山田さんです」と紹介することにも何ら違和感を覚えることはないが、こうした表現と平行的に「私は田中さんです」とする自己紹介には抵抗を感じる。日本語として自然な表現としては、「私は田中です」であろう。

(9) − (12) では生徒や保護者が自己紹介をする際、波線部分で示すように I'm Nancy Adams や I'm Marion Swanson といった言語形式を用いており、大人の女性であっても I'm Mrs. X といった形式は使っていない。この点で校長と生徒・保護者のそれぞれの自己紹介には、非対称的な関係が見られる。校長は I'm Mr. X という形式を用いるが、生徒・保護者はそうしないのである。相手への呼びかけという点でも非対称性が見られ、生徒達は目上の校長先生に対しては敬称を付けて Mr. Girard と呼びかけなければならない。この点について、同小説内の次の発言が示唆的である。

(15) "Thanks, Mil- ..." Laura stopped mid-word. "I'm sorry, but what should I call you?"

"Mrs. Watkins is fine, but if there are no students around, you may call me Mildred."　(CTTO)

これは若い女性教員が先輩職員に対し、話しかける際の呼びかけ方を確認した場面である。先輩職員からの指示は、周りに生徒達がいる時には Mrs. Watkins と敬称を付けて呼んで欲しいが、周囲に生徒がいなければニックネームで構わないという発言である。ここから推察すると、敬称を付けて教職員に呼びかける姿を先生自身が生徒達に常時示すことで、生徒達にもそのように呼ばせようとする教育的な目的がこの発言の背景にあると考えられる。これと同様に、Girard 新校長が生徒達に対して I'm Mr. Girard と挨拶するのは、教員と生徒という立場の違いを明確にし、生徒達に適切な言葉遣いをさせようとする狙いがあるものとみられる。

ここまで見てきた自分自身に敬称を付けて自己紹介をする事例は、最近になって新しく発達してきた用法というわけではない。(16) は 19 世紀前半に書かれた Charles Dickens の *Oliver Twist* からの引用で、新しい職場での先輩 Noah Claypole が、主人公の Oliver に対して自己紹介をしている場面である。ここでも同様の表現形式が見られる。

(16) '**I'm Mister Noah Claypole**,' said the charity-boy, 'and you're under me. Take down the shutters, yer idle ruffian!' With this, Mr. Claypole administered a kick to Oliver, and entered the shop with a dignified air, which did him great credit.　*(Oliver Twist)*

この場面でもやはり自分自身に敬称を付けて I'm Mister Noah Claypole と自己紹介をしている。特に注目したいのは、I'm Mister Noah Claypole と名乗った職場の人間が先輩風を吹かせ、you're under me と Oliver に言いながら一発食らわし、大きな態度をとっている点である。こうした一連の振る舞いは、Oliver が自分より

も下の立場であることを強く意識させようと考えて I'm Mister という敬称を用いた自己紹介を行い、さらに you're under me と言ってその意図を念押しし、暴力までふるっているものと解することが出来る。自分自身に敬称を付けて名乗る Noah Claypole は、相手よりも上の立場にあるという印象を持たせようとしているのである。

(17)は別の小説からの同様の事例で、自宅で陣痛の始まった夫婦の元に姿を現した助産師 Mrs. Westlake が、自分自身を I'm Mrs. Westlake と初めて名乗っている場面である。

(17) [Charlie] sat down beside [Becky] on the bed and held her hand for some time before either of them spoke.

"Have you sent for the midwife?" he eventually asked.

"She certainly has," said a voice from behind them, as a vast woman entered the room. She wore an old brown raincoat that was too small for her and carried a black leather bag. From the heaving of her breasts she had obviously had a struggle climbing the stairs. "**I'm Mrs. Westlake**, attached to St. Stephen's Hospital," she declared. "I do hope I've got here in time." Becky nodded as the midwife turned her attention to Charlie. "Now you go away and boil me some water, and quickly." Her voice sounded as if she wasn't in the habit of being questioned. Without another word Charlie jumped off the end of the bed and left the room. *(As the Crow Flies)*

Mrs. Westlake は名乗り終えるとすぐに、夫の Charlie に急いで湯を沸かすよう指示している。この場面で注目したいのは、後続する Her voice sounded as if she wasn't in the habit of being questioned という描写から、彼女の発言は質問を許すような雰囲気ではなく、常に一方的な命令のように強い調子であったという点である。I'm Mrs. Westlake という形式で名乗ることから感じさせる、自分は相手よりも上の立場だととらえている態度と、声の調子が高圧的に聞こえるという特徴は一貫している。この事例でもまた、自分自身に敬称を付けて名乗る人物からは、相手よりも上の立場にあるという印象を持たせようとする意図を感じる。

ここまで観察してきたように、I'm Mr. X という言語形式での自己紹介には、発話者が聞き手より上の立場だと認識していることを示し、聞き手にはそれにふさわしい態度で接するよう求める機能があると考えられる。この形式での自己紹介にはそうした働きがあるからこそ、Noah Claypole のようにこの形式を故意に使用し、相手より優位な位置に立とうとすることもあるのだと考えられる。

3. 三層モデル

ここまで観察してきた I'm Mr. Girard という表現は、敬称を付けて他者（男性）を紹介するのと平行的に男性が自己紹介をしているもので、自分自身を客体的にとらえた表現と見なすことができる。英語がこのように客体化した表現を好む言語である点はこれまでに指摘されてきた（池上（2006）、井出（2006））が、そうした特徴の背後にはどのような仕組みがあるのかについて、廣瀬が提唱する三層モデル（Hirose（2013、2015）、廣瀬（2016、2017））を用いて明らかにしていきたい。

3.1 公的自己と私的自己

本節の中心をなす三層モデルの説明に入る前に、その前提となる道具立てとして公的自己と私的自己につい

て説明しておく。一連の研究（Hirose（1995、2002、2013、2015）、廣瀬（1997、2016、2017））において廣瀬は、話し手というものは一枚岩ではなく、思いの主体である私的自己と、伝達の主体である公的自己の二つの側面に解体されるとする。このうち私的自己とは、他者への伝達を意図せずに思いを表出する話し手の側面である。例えば外で雨が降っている様子を見て(18）のように言うのは、他者への伝達を意図しておらず、私的自己による思いを表していることになる。こうした私的自己による（18）のような表現を私的表現と呼ぶ。

（18）雨だ。

一方、雨が降っている様子を他人に伝えようとして（19）のように言うことは可能で、これらは伝達を意図する公的自己による表現である。公的自己とは伝達の主体としての自己のことで、発話の相手である聞き手を想定している自己のことである。こうした公的自己による（19a、b）のような表現を公的表現と呼ぶ。

（19）a. 雨だよ。
　　b. 雨だって。

このような私的自己・公的自己という捉え方のもとでは、日本語の「自分」という言語形式は私的自己を表す固有の表現、一方、英語のＩは公的自己を表す固有の表現とされる（Hirose（1995、2002、2013、2015）、廣瀬（1997、2016、2017））。

3.2　三層モデルからみた英語の客体表現

廣瀬が提唱する三層モデルでは、言語使用は状況把握層、状況報告層、対人配慮層という三つの層から構成されるとする（Hirose（2013、2015）、廣瀬（2016、2017））。状況把握層は、（18）の私的表現のような自己の思いを表すレベルのことで、私的自己と関わる。状況報告層とは、（19a、b）のような公的表現を伝達する際に関わる、把握した状況を他者へ伝達報告する層のことで公的自己と結びつく。最後の対人配慮層とは、親しい人には（19a、b）のような表現を使う一方で、目上の人には「雨です」「雨でございます」といった丁寧語を使うように、聞き手に応じて異なる言語形式を用いることに見られるような、伝達の際に見せる配慮と関わる層である。日英語の相違は、こうした三つの層の結びつき方の違いによって説明可能であるとするのが三層モデルであり、（20）に示すように、日本語は状況把握層が他の層から独立し、状況報告層と対人配慮層が一体化している。一方、（21）で示す通り、英語は状況把握層と状況報告層が一体化しており、それに対人配慮層が結びつくとされる。

（20）日本語　　[状況把握層]　　[状況報告層　＋　対人配慮層]
（21）英語　　[状況把握層　＋　状況報告層]　　[対人配慮層]

以下では、英語が客体表現を好むという事実を三層モデルがどのように捉えるかという観点から、いくつかの証拠をもとに、英語は状況把握層と状況報告層が一体化しているという点に絞って論じていく。例文及び説明はHirose（2013、2015）、廣瀬（2016、2017）からのものである。

話し手にとって直接知覚できる心理状態は話し手自身のものだけであり、話し手以外の第三者の心理状態を

直接的に知覚することは出来ない。これはどのような言語の話者であっても変わることのない、認識上の問題である。この点が言語形式にどのように反映されるかを考えるために、次の日英語の対比を考えてみよう。

(22) ｛私は／＊君は／＊彼は｝ 寂しい。
(23) ｛I am / You are / He is｝ lonely.

心理状態をことばで表現する場合、日本語では（22）で示すように、直接知覚することの出来る話し手、すなわち一人称主語だけが、「寂しい」など心理述語の主語となることができる。二人称・三人称が主語の場合は、「君は寂しそうだ」「彼は寂しそうだ」といった形で、第三者を客体的な描写の対象として記述しなければならない。

一方、(23) が示すように英語の場合、lonely など心理述語の主語となれるのは一人称だけでなく、二人称・三人称の主語も許される。人称の違いに関わらず、知覚の主体が心理述語の主語となれるのである。日本語とは異なり、二人称・三人称主語の人物を客体的な第三者として描写するのと平行的に、英語は一人称主語の人物も話し手が客体的に描写する仕組みになっている。話し手が寂しいという心理状態を知覚すると、英語はそうした自分自身の心理状態を客体的な対象として他者へ伝達報告するという形を取るのである。このように英語では、話し手の認識がすなわち話し手による伝達報告となるのであるが、これは話し手の知覚という私的自己の部分に、話し手による伝達という公的自己の視点が入り込んでいることを意味する。三層モデルにおいては、私的自己と関わる状況把握層と公的自己に関わる状況報告層が一体化していることを示している。英語ではこれら二つの層が結びついて一つになっているため、状況把握がすなわち状況報告となり、自分自身の心理状態を知覚すると、その思いを他者へ客体的に伝達報告するという形を取るのである。

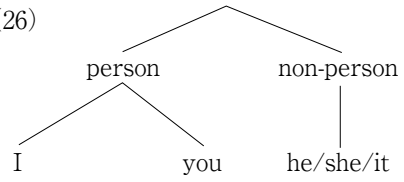
今度は次の対比を考えてみよう。

(24) a. 向こうにバスが見える。
　　b. I see a bus over there.
(25) a. 家のどこかで変な物音が聞こえた。
　　b. I heard a strange noise somewhere in the house.

これらの例において、遠くにバスを見たり、変な物音を聞いたりした認識の主体は話し手である。このような状況の認識主体を日英語が言語的にどう表すかを考えると、日本語では（24 − 5a）で示す通り、知覚の主体である話し手を明示しない。仮に明示すると、他の人とは異なり私には向こうにバスが見えた、他の人は聞こえなかったが私には家のどこかで変な物音が聞こえたというように、他人と比較した対比的な読みとなる。一方、英語では（24 − 5b）で示す通り、知覚の主体を明示的な主語 I として表現しなければならない。向こうにバスが見えたり家のどこかで変な物音が聞こえるという感覚は、知覚主体である話し手の認識であり、これは私的自己と関わる。日本語はこの知覚内容を、伝達を意図しない私的表現として扱う。それに対し、英語ではこの私的自己と関わる認識に伝達者である話し手の視点が入り込み、知覚の主体を明示的な主語 I として客体的に報告する仕組みになっている。英語がこのような仕組みになっていることは、三層モデルにおいて状況把握層と状況報告層が一体化していることの証拠である。(21) で示した通り英語ではこれら二つの層が一体化しているため、話し手が知覚した事象の把握がすなわちその客体的な報告という形を取るのである。

ここで三層モデルが英語の人称代名詞をどのようにとらえるかを見ておきたい。(26) で示すように、このモデルでは一人称のIと二人称のyouが人称（person）を構成し、それ以外は非人称（non-person）とされる（Benveniste（1971）、Hirose（2013、2015）、廣瀬（2016、2017））。

(26)



対話の場面において話し手Iは聞き手youを想起し、youはIを想起する。対話において話し手と聞き手は交互に交替し、したがって両者は対等の関係にあると言える。そのため、話し手自身が状況内に身を置いた対話の場面であっても、youを客体的に描写するのと同様にIも客体的に描写することになる。このことから、英語では話し手自身が状況内に身を置いていても、その話し手は客体的に主語Iとして明示されることになるのである。

さらに次の例を考えていく。＜　＞はその内部が私的表現、[　] はその内部が公的表現であることを示す。

(27) a. ＜自分は絶対に正しい＞。
　b. [＜自分は絶対に正しい＞と僕は思った]。
　c. [＜自分は絶対に正しい＞と君は思った]。
　d. [＜自分は絶対に正しい＞と彼は思った]。

(28) a. <Self be absolutely right>.[5]
　b. [I thought <I/*self was absolutely right>].
　c. [You thought <you/*self were absolutely right>].
　d. [He thought <he/*self was absolutely right>].

(27a) の日本語の例で、「自分は絶対に正しい」という表現は話し手自身の思いを表しており、これは伝達を意図しない私的表現である。そしてこの思いを他人に伝える (27b − d) は公的表現であるが、注目すべきは、「僕」「君」「彼」という主語の人称の違いにかかわらず、私的表現部分の「自分は絶対に正しい」は一定で変わらないという点である。[6]

英語では (28a) のSelf be absolutely rightが話し手自身の思いを表しており、この話し手の認識が私的表現である点は日本語と変わらない。ところがこの思いを他人に伝える (28b − d) の公的表現において、私的表現部分の主語とそれに対応する動詞の形式は、下線部で示す通り、誰がそう思ったかを反映する言語形式に変えなければならない。つまり、思いの主体が誰であるかがこの部分に明示されなくてはならないのである。英語では認識の主体である私的自己の外側に公的自己の話し手を想定し、この話し手からみた人称で私的自己selfを代名詞I、you、heに置き換えて表現する仕組みになっているのである。そのため、(28b) で見る通り、話し手自身の思いも二人称・三人称主語の場合と平行して客体的に描写されることになるのである。ここでもまた、英語では私的自己の部分に公的自己の視点が入り込んでいることが示されており、英語では状況把握層と状況報告層が一体化していることの証拠となっている。

英語で状況把握層と状況報告層が一体化していることは、さらに次の事実からも示される。

(29) a. Today is Saturday.
b. I SAY TO YOU Today is Saturday.

Ross (1970) の遂行分析によると、(29a) のような英語の平叙文は、(29b) に示すように基底で I SAY TO YOU あるいは I TELL YOU といった遂行節を持つとされる。三層モデルの観点からこれを捉え直すと、Today is Saturday の命題部分は状況把握層に対応し、I SAY TO YOU の遂行節は状況報告層に対応する。このように、状況把握層と関わる命題部分に状況報告層と対応する遂行節を組み込んだ (29b) のようなタイプの形式が英語では無標であることからも、英語は状況把握層が状況報告層と一体化しているということが出来る。

4. 三層モデルによる I'm Mr. Girard の説明

2 節で観察してきたように、自己紹介や、電話での応対において自分自身に対して敬称を用い I'm / This is Mr. Girard と述べる言語形式は、他人を紹介する This is Mr. Girard という表現と平行しており、自分自身を客体的に捉えた表現である。この形式の持つ働きは、発話者が聞き手よりも上の立場にいると認識していることを示し、聞き手にはそれにふさわしい態度で接するよう求めるというものである。3.2 節では、英語が客体表現を好むのは、三層モデルにおいて英語が状況把握層と状況報告層を一体化させていることによると論じた。自分自身を Mr. Girard と呼ぶことは、日本語の母語話者が感じるような特殊な言語現象ではなく、英語が固有に持つ状況把握層と状況報告層の一体化という特徴に支えられているのである。[7] このように、従来の研究 (池上 (2006)、井出 (2006)) で指摘されてきた英語のこうした特徴は、三層モデルによって原理的に説明することが可能となった。なお、三層モデルは英語の客体表現を説明するためだけの道具立てではない。廣瀬の一連の研究で見るとおり、この理論を用いることで日英語の様々な文法現象の相違を原理的に説明することができる (詳細は (Hirose (2013、2015)、廣瀬 (2016、2017)) を参照)。本研究ノートでは I'm Mr. Girard という表現が客体表現の一例であり、三層モデルを用いることでこうした事例が適切に説明できることを論じてきた。その結果、このモデル自体の妥当性をさらに示すことになったと考えられる。

[註釈]

* 本研究ノート執筆にあたり、二人の査読者より貴重なコメントを頂きました。ここに記して感謝申し上げます。

1 (1) (2) は I'm Mr. Thomas、my name's Mr. Forsyth、(3) は This is Mr. Brown という形式の違いがあるが、本研究ノートではこうした「主語 + be 動詞の変化形」部分の形式の違いについては問わない。

2 日本人研究者による語法研究書では、「日本語の場合とは異なり、英語では自分のことを Mr. … / Mrs. …などと言うことができる。」(柏野 (2010)、下線は筆者による) と記述されており、こうした表現が日本語母語話者にとって異質であることが明示されている。

3 例えば Copperud (1980) では次のように指摘されている。"*Mr.* should never be self-applied, as by some men in identifying themselves when they answer the telephone, for example. An exception is generally considered allowable for teachers addressing their pupils in elementary and secondary schools."

4　この例は電話の場面で、保護者に対し自分の立場を明示している。電話での名乗りということで、I'm ではなく慣習化した this is を用いている。注 1 も参照。

5　3.1 節で述べたように、英語の I は公的自己を表す固有の表現である。その点を考慮し、I am という形式での表記を行っていない。

6　ここでは「自分」はそれぞれの主語と同一人物を指す解釈を問題としている。「自分」をそれぞれの主語と同じ形式の「君」「彼」に変えると同一人物を指す解釈ではなくなってしまい、それはここで意図する解釈ではない。

7　I'm Mr. Girard. という形式が用いられるのは、学校の生徒達という特定の相手に向けて教員が自己紹介をする場面である。このことは、三層モデルにおける英語の構成 (21) において、状況把握層＋状況報告層に対人配慮層も関わってくることを示唆している。この点については、三層モデルのデフォルト解除（Konno (2015)、今野（2017)、五十嵐（2017)、金谷（2017)）という考え方で扱っていくことが考えられる。デフォルト解除とは、概略、日英語での三層の結びつき (20)(21) をそれぞれの言語のデフォルトとし、その基本構成から外れるという考え方である。この点の詳細な議論は、稿を改めて論じていくこととする。

参考文献

Benveniste, Emile（1971）*Problems in General Linguistics*, trans. by Mary Elizabeth Meek, University of Miami Press, Coral Gables, Florida.

Copperud, H. Roy（1980）*American Usage and Style: The Consensus*, Van Nostrand Reinhold, New York.

Hirose, Yukio（1995）"Direct and Indirect Speech as Quotations of Public and Private Expression," *Lingua* 95, 223-238.

廣瀬幸生（1997）「人を表すことばと照応」『指示と照応と否定』，中右実（編），1-89，研究社，東京.

Hirose, Yukio（2002）"Viewpoint and the Nature of the Japanese Reflexive *Zibun*," *Cognitive Linguistics* 13, 357-401.

Hirose, Yukio（2013）"Deconstruction of the Speaker and the Three-Tier Model of Language Use," *Tsukuba English Studies* 32, 1-28.

Hirose, Yukio（2015）"An Overview of the Three-Tier Model of Language Use," *English Linguistics* 32, 120-138.

廣瀬幸生（2016）「主観性と言語使用の三層モデル」『ラネカーの（間）主観性とその展開』，中村芳久・上原聡（編），333-355，開拓社，東京.

廣瀬幸生（2017）「自分の言語学－言語使用の三層モデルに向けて－」『三層モデルでみえてくる言語の機能としくみ』，廣瀬幸生・島田雅晴・和田尚明・金谷優・長野明子（編），2-24，開拓社，東京.

Howard, Godfrey（1997）*The Macmillan Good English Handbook*, Macmillan, London.

井出祥子（2006）『わきまえの語用論』大修館書店，東京.

五十嵐啓太（2017）「言語使用の三層モデルから見た英語の遂行節－I tell you と情報の優位性」『三層モデルでみえてくる言語の機能としくみ』，廣瀬幸生・島田雅晴・和田尚明・金谷優・長野明子（編），112-32，開拓社，東京.

池上嘉彦（2006）『英語の感覚・日本語の感覚：〈ことばの意味〉のしくみ』NHK 出版，東京.

金谷優（2017）「言語使用の三層モデルから見た because X 構文」『三層モデルでみえてくる言語の機能とし

くみ』，廣瀬幸生・島田雅晴・和田尚明・金谷優・長野明子（編），90-111，開拓社，東京.

柏野健次（2010）『英語語法レファレンス』三省堂，東京.

小西友七（2006）『現代英語語法辞典』三省堂，東京.

Konno, Hiroaki（2015）"The Grammatical Significance of Private Expression and Its Implications for the Three-Tier Model of Language Use," *English Linguistics* 32, 139-155.

今野弘章（2017）「デフォルト志向性の解除」『三層モデルでみえてくる言語の機能としくみ』，廣瀬幸生・島田雅晴・和田尚明・金谷優・長野明子（編），69-89，開拓社，東京.

Ross, John R.（1970）"On Declarative Sentences," *Readings in English Transformational Grammar*, ed. by Roderick A. Jacobs and Peter S. Rosenbaum, 222-272, Ginn, Waltham.

引用例文出典

Dunlap, Stan *Come to the Office, Adventures of a new Principal*.

Dickens, Charles *Oliver Twist*.

Archer, Jeffrey *As the Crow Flies*.